

第1回重点化課題検討タスクフォース 概要

日時：平成24年4月23日（月）13:00-14:15

場所：4号館4階第2特別会議室

- 議題：（1）科学技術イノベーション戦略協議会で検討すべき課題の抽出
（2）重点化課題を抽出するための視点（評価軸）の設定
（3）その他

出席者：奥村直樹議員（座長）、白石隆議員、中馬宏之専門委員（一橋大学イノベーション研究センター教授）、内閣官房、内閣府、総務省、文部科学省、厚生労働省、経済産業省、国土交通省、防衛省

出席者の主な発言内容：

- 「議題（1）科学技術イノベーション戦略協議会で検討すべき課題の抽出」について
 - ・資料1－1のTFの役割③とは、6月以降も引き続き検討の場を設けて、第4期科学技術基本計画（以下「第4期基本計画」と略す）の第Ⅲ章における重点的に取り組む課題を検討していくという意味か。
 - ・重点化課題の抽出はTFで結論づけたい。役割③は、抽出した重点化課題をフォローアップする体制を指している。（内閣府）
 - ・資料2の表の「新たな資源獲得」という課題のうち、「エネルギー探査」がグリーンイノベーション戦略協議会で、「効率的かつ循環的利用」等が重点化課題検討TFとなっているが、どのような考え方で分けたのか。
 - ・第4期基本計画の第Ⅱ章と第Ⅲ章の本文や、平成23年度及び平成24年度科学技術重要施策アクションプラン（以下「AP」と略す）と照らし合わせながら整理した。（内閣府）

⇒資料2について合意。資料2を前提に次の検討ステップに移る。

- 「議題（2）重点化課題を抽出するための視点（評価軸）の設定」について
 - ・評価軸1については、極力定量評価とあるが、極力客観評価だと思う。また、客観性を保つには、可能な限り情報の透明化やオープン化を可能にする仕組みを考えるべきである。
 - ・様々な評価を受けてきたが、貢献度等の数字を出すのは難しい。数字を出したところしか見られないということになりがちである。極力定量評価したものについて、極力客観評価することではないか。また、定量化できない部分の客観評価が大事。

- ・数字 자체はなるべく書いた方がよいが、試算する上での仮定の設定の仕方が重要。仮定も含めて記載できるようにするとよい。
- ・トランスペアレンシーという意味でも重要。プロセスも見せるべき。
- ・第4期基本計画はイノベーションの創出を目指している。その視点で抜けている評価軸がないか、ぜひ補足をお願いしたい。
- ・イノベーションは、人と場所と時が同期する形で実現する。したがって、それらの同期化が実現する前に潜在力がたまっていくプロセスがある。その種の潜在力はなかなか定量評価できない。
- ・潜在力で大事なのは人である。人材については第4期基本計画の第IV章で書かれている。本TFでは（達成すべき課題の）対象を議論している。
- ・評価軸3の「国際的位置付け（政策上の位置付け）」とは、我が国の政策の国際的な位置付けという意味か。
- ・環境問題などの国際的課題への貢献、という意味。（内閣府）
- ・我が国の政策が、国際的に意義の高いものであるかどうか、という意味と理解してはどうか。
- ・評価軸3に技術競争力の優位性という表現があるが、課題を解決する技術力が高いという意味ではないか。解決するにあたって必要な技術力を抽出したいのか。
- ・世界的に重要な課題であると同時に、我が国に（技術的な）ポテンシャルがあるものを抽出するものと理解すべきである。
- ・特定の分野での世界のR&Dネットワークがどうなっていて、その中で日本勢がどういう立ち位置にあるかが把握できていると、日本として推進すべきものがより客観的に見えてくる。
- ・評価軸3の研究開発ランキングを何で見るか。特許もしくは論文もあるが、グローバルなR&Dネットワークの中で勝ち抜けるポテンシャルを持っているかという点も重要。トライ＆エラーをやりながら適切に評価できる指標が作れるとよい。
- ・既存の研究領域のランキングは様々行われている。一方、これからやるものは正確に評価できない。その推進体制が効率的だったのか、などを複眼的に見て、TFにおいてこのテーマをこの実行体制で推進すればうまくいく、といった内容を決断していきたい。この検討結果は、各省において、個別施策を検討する際に生かしてほしい。
- ・評価軸6についてはAPの重点的取組の検討の視点には入っていないとの説明だったが、両者の整合性を考えるべきである。
- ・パッケージ化を評価軸に設定すると、大事な課題であるものの、組織の中で閉じるもののが評価されない、ということにならないか。
- ・1つのみの施策で重要な課題の解決に結びつくことは難しいと考えている。社会的課題に直接結びつきにくいものは、TFとは別の場で議論した方がよい。
- ・経済学では、パッケージ化できるかどうかの基準ではなく、外部経済効果が大きいかど

うか、という表現をする。外部効果の大きさは短期、中期、長期で違ってくるが、今の議論では評価のための時間軸が不明確である。おそらく中長期で考えるべきだろう。

- ・パッケージ化とは、例えば「自然災害から人々の生活の安全を守る」という課題に対して、これに貢献する各省の個別施策を束ねるという意味である。
- ・パッケージ化とは、重点化し、骨太な課題として取り上げるということと、個別施策を束ねて効率的に推進することとの両方を指す。対象の議論だけではなく、パッケージ化すればより効率的になる、という視点でも議論し、絞っていってよいのではないか。
- ・これまでのAPはデータに基づいた評価ができていないという反省がある。できるだけ短期間にデータを集約して、数値化できるものはしていきたい。パッケージ化については、選ばれた課題を実効的に推進するという点で、施策や取組を複合的に進めていくという意味。（内閣府）
- ・パッケージ化は、基礎研究、実用化研究、民間での活用といった時系列での連携も入っている。個別施策を束ねるという意味だけではない。課題解決型イノベーション創出のポイントである。これまで、現時点で連携しているかどうかという議論が主だったが、時系列的、ステップバイステップでの連携もあると考えている。
- ・資料3の評価軸に沿って、どのレベルの課題について重点化をしていくのか。参考資料1に論点が書かれているが、TFではこれらの論点を議論していくのか。検討スケジュールがわかりにくい。
- ・評価軸に沿って、資料1－1別添の黄色部分を議論していく。6月までに取りまとめ、その後各省が個別施策を検討していく。事務局で流れを整理する。（内閣府）
- ・課題の重点化に向けた議論やその後のプロジェクトの立案は、先に課題を決めて後から各省に提案を求めるのではなく、総合科学技術会議と各省が当初から一体となって検討を進めるべき。
- ・議論が広がりすぎるので、ある程度絞りこんで議論すべき。総合科学技術会議と各省が協力して課題を検討できるような場とすべき。
- ・TF2回目までに密に議論をする。（内閣府）

⇒議論を踏まえ、重点化課題を抽出するための視点（評価軸）の修正は奥村座長に一任する。第2回TFまでのスケジュールを整理し、後日共有する。

以上